

ミシンの悲哀

首藤 静夫

自宅の向かい、道路脇に光るものがある。今日は粗大ゴミの日で、いくつかの家具類が出ている。光るものはその中にある。ここは独身女性用のアパートの前である。二月半ばのこの時期、卒業か結婚か、おめでたい引越してあつてほしい。

光っているのはミシンだった。まだ新しそうで、雨上がりの朝の光に映えている。気がひけたがそばまで行った。ミシンはJ社のもので、粗大ゴミのステッカーが二百円分貼られている。脚長の棒やテーブルが五百円分貼られているのに比べると意外な感じがした。立派なミシンも粗大ゴミとしてサイズだけで判断されるのか。

狭いアパートの独身女性がミシンを持っていたのには感心した。ただそれがゴミに出ているのに違和感が残った。針が曲がったか何かで使えなくなったのだ。修理の間と費用を考え、この際捨てちゃえとなったのだろう。安いものは一万円前後で買えるそうだからミシンは使い捨てられたのだ。

ミシンといえば近所の奥さんがズボンやスカートの裾上げ等を頼みに妻のところにくる。ミシンの調子が悪くて、というのが決まり文句のようだ。本当に故障か見にいけよとからかうが妻は笑っている。

子供の頃、田舎の母は重そうなミシンを手で足で動かした。大事に使い、丁寧に手入れをしていた。厚手の生地と古綿で野球のグローブを作ってもらったことがある、そういう時代だった。

自転車も同様に、ひと頃までは潤滑油をさしたり車輪回りを拭いたりで丁寧に扱った。一家の貴重品だったので、放置自転車など考えられなかった。

近頃の商品は多機能でデザインも美しいが、とにかく故障しやすい。耐用年数を短くして買い換えを促がしているから当然なのだが淋しいものだ。どっしりした重い文化が消えてしまった。

人間も同じで、いろいろとやり玉に挙がる政治家たち、その中身の薄っぺらいこと。僕も注意しないと二百円のステッカーを貼られかねない。いや、長身だから五百円にはしてくれそうだ。